

## 外国語授業における動画と映画の効果と可能性

ツァイルホーファー, ルイーサ  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1804171>

---

出版情報：言語文化論究. 38, pp.17-25, 2017-03-03. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：



## 外国語授業における動画と映画の効果と可能性

ルイーサ・ツァイルホーファー

### 1. はじめに

近年のメディア研究においてはeラーニングやWeb 2.0が注目されている。それらの研究はまだ始まったばかりだが、新しい技術によって映画やビデオが身近になり、教室の中でもデジタルプレゼンテーション（テレビ、プロジェクター、ノートパソコン、電子ホワイトボード）を使う機会が多くなり、動画の作成や投稿も簡単になった（安価なカメラやスマートフォン、インターネットを経由した動画投稿サイトがこれを可能にした）。一昔前までは、利用できるのは静止画のみであったが、技術の進歩によって動画の利用が可能になった。ただし、静止画と比べると教育の場面での動画利用の歴史は非常に短い。教育の現場において動画を利用することにはどんなメリットがあるのだろうか。

この論文では、外国語の授業に動画を利用することのメリット、オーセンティックな映画の内容による学習効果の違いと、映画を見る際に字幕の与える影響およびオーディオビジュアルリテラシーの重要性について考察する。

**キーワード：**映画、動画、メディア教育、オーディオビジュアルリテラシー、フィルムリテラシー

### 2. 映画と動画

動画は無声映画、または故意にサイレントにした映画を除いてオーディオビジュアルメディアである。特に映画は自然なプロセスを見せるのに向いている(Niegemann et al. 2008: 266)。そして理系の授業（物理学や数学の授業）では、普段目にすることができないものを可視化するスローモーションやタイムラプスが人気である。映画は話し言葉を教室まで届けてくれるだけでなく、様々なジェスチャーも同時に映し出す(Löschmann 1991: 80)。

近年の外国語教育学の知見によれば、コンテキストを伴った学習が効果的である。映画の内容はすべて文脈で構成されているため、映画は外国語の教育に非常に有効なツールであると考えられる。

Allan (1985: 49) は、教室というのは視覚的、または聴覚的に外国語に触れることができる唯一の場所であると述べているが(“so video becomes a means of giving them a ‘language bath’ in the classroom”), 現在は技術の進歩によって映画や動画、YouTubeなどで外国語に触れる機会が非常に多くなっているため、この意見は時代に沿わないように思われる。しかしながら、学生は教員が紹介したビデオや映画は観るかもしれないが、それ以外のものとなると、選択肢が多すぎるために、自ら進んで情報を得ようとはしないのが実情である。

Edelhoff (1975: 26) は、映画によってメタ言語的な反射を鍛えることができると述べている。な

ぜなら映画は観たことについて考えたり、判断したり、特に話す意欲を促すことに繋がるからである。映画の強みはジェスチャーや顔の表現、ノンバーバルな動作を一度に学習できる多面性にある。景色、祭り、国の雰囲気を一歩も外に出ることなく教室で味わうことができるのである。“Deutschland von oben” は、ドイツ国内の風景を上空から撮影した、ドイツ国内の劇場用に作られた映画であったが、ドイツの景色、街並みにフォーカスを当てたこの作品は、ドイツ語を学ぶための教材として世界中で人気を博している。もちろんどキュメンタリーや文学作品もターゲットカルチャーを理解するために有効である。しかし、映画以外のメディアでは全てを一度に学習することは難しいと思われる。

## 2.1 オーセンティックビデオ

学習効果を上げるには、教室の中にイマージョンに近い環境を作ることが有効だと言われている。また、オーセンティックビデオで使われている言語は、現実の代わりとして外の風景や雰囲気を教室の中で体験させてくれる。

オーセンティックとは基本的に母語を話す人達がターゲットグループとなっていることを意味する (Allan 1985: 30)。Sherman (2003: 2) はオーセンティシティーについて次のように述べている：

Authenticity itself is an inducement – there is a special thrill in being able to understand and enjoy the real thing. In addition, video is today’s medium. Print may still be powerful but many people spend more time with audio-visual media; video techniques, discourses and clichés are more familiar to them than to the world of books and papers.

Sherman はオーセンティックビデオを使うメリットを次のようにまとめている。

- *For its own sake* 自分で楽しんだり、情報を得るために映画やコマーシャルを観る。
- *For comprehension of the spoken language* 様々な話者の声を聞くことでリスニングの練習ができる。
- *As a language model* 語彙・文法・構文の種類が多いため、より現実的である。例えば、ドラマには普段練習できないダイアログ等も多く出てくる。
- *For culture* ターゲットカルチャーをより身近に感じることができる。(Sherman 2003: 13): Video drama reflects major cultural movements (e.g. changing perception of women), but it also creates culture (witness icons like Mickey Mouse).
- *As a stimulus or input* ディスカッションやライティングの練習、または自分のプロジェクトに対する意欲を上げることができる。
- *As a moving picture book* 教室の中で場所・人・出来事を直接感じることができる。

Müller と Raabe (1995: 319) は、必ずしも全ての映画が外国語の授業に使えらるには限らないと述べている。

映画は自分のピクチャーランゲージを持っているため、話す必要はない。例えば駅のシーンで後ろにある大きな時計に11時と映っているとする。俳優はそこで時計を見て「今は11時です」と言う必要はない。そのため、初学者のための外国語授業において重要なランゲージインプット

トが欠けていることになる。(筆者訳)

上の引用は外国語教育に向かない映画があるという内容だが、初学者のコースでは、別の教え方もできるので、どのような映画を選択するかが重要であると思われる。

しかしながら、話すシーンが多すぎる場合は、かえって学生の混乱を招く恐れがある (Sherman 2003: 15)。Sherman (2003: 16) は、話すシーンが少ない、分かりやすい行動は外国語の理解を容易にすると述べている。これは上記の Müller と Raabe とは正反対の主張である。

Allan (1985: 73) は、教授者は学習者のレベルに応じて素材を提供すべきであり、映画も例外ではないと述べている。また、A1 (初心者向け) の授業では言語の複雑性を強くコントロールすべきであると述べている (同書)。

学習者のモチベーションを下げ、彼らが外国語を諦めてしまったりすることがないように、初学者に動画を見せる場合、フラストレーションを与えない、予見が可能で、理解しやすいものを選択すべきである。(Overman 2002)。ただし、初心者のレベルでも、特定の専門的な学習者のグループにおいては、テーマの理解が容易な場合もある。中級の人たちは、途中で興味を失い挫折することが多いので、そういった人たちには教授者がコントロールするのを少し控えて、それぞれの興味にあった素材を提供する必要がある (Allan 1985: 73)。そこでは映画を見せることが非常に有効である。

Video is a good medium with which to move them away from beginner's preoccupation with individual words to an attempt to follow the general drift of a message. Using video at this level is a good occasion to focus on the story or the way a topic is treated or the way a programme is structured. Encourage comment, speculation and prediction rather than asking for reproduction of what they have heard. Use a lesson based on video as an occasion to do something different (Allan 1985: 73).

上級の授業では、映画は“provider of real world experience”として働く。上級では言語よりも映画の楽しさや内容が重要になってくるのである (Allan 1985: 74)。

オーセンティックな素材は様々な解釈の仕方やオープンな授業を可能とするため、映画は非常に優れたソースである (Brandi 1996: 13)。

## 2.2 字幕

字幕を付加すると、映像の他に文字という別の視覚要素が加わるため、字幕は以前から大きな論争を呼ぶテーマであり、研究者間においても様々な意見がある。

またビジュアルチャンネルはオーディオチャンネルよりも強いため、オーディオとビジュアルでは感じ方が変わると言われている。

Rauh (1990: 95) は、映画をビジュアルメディア、即ち見る媒体であると定義しているが、これに対して全く違う定義をしているのが Noras (2006: 62) である：

音がある映画が誕生してから、画像と音声の割合について研究されるようになった。これらの研究によれば、音声は画像よりも強く、音声が強ってしまう。視覚的にも音声はどこを見るのか導くのである。(筆者訳)

ここで Noras は、言語のコントロールファンクション、特にドキュメンタリー等を念頭において

いるようだが、どのような研究に基づいているのか明らかにされていない。一方、Sherman (2003: 16) は、Rauh と同じくビジュアルインプットの方が優位であると述べている：

[...] we must recognize that the eye is more powerful than the ear, and (all other things being equal) will dominate. If viewers are offered both reading and listening, they will read in preference to listening, [...] people will read subtitles even if they have no need of them, e.g. when watching a film in their own language with subtitles also in their own language.

現在の主流であるメディア理論によれば、映像と字幕の二つの要素がビジュアルチャンネルから一度に脳内に入り込む場合大きな負荷をがかかり、音とビジュアル画像を処理する余裕がなくなると言われている。

実証的な研究はまだ少ないが、チャンネルが多ければ多いほど良いとされている (Baltova 1999, etc.)。目標言語による字幕は語彙的に干渉がなく、母語の字幕よりも効果的であるため、目標言語の字幕と音声があることで、学習者の内容理解を容易にすることができる (Guichon/McLornan 2008: 1)。

	母 語	目 標 言 語
母語への吹き替え	-	+ 異文化理解 - 言語スキルは変わらない
母 語 の 字 幕	-	- オーディオインプットは排除されるためオーディオビジュアルリテラシーには不向き + 親しみがわく
目標言語の字幕	+ 語彙の増加	+ リーディングスキル + オーディオビジュアルリテラシー

### 2.3 外国語教育映画

外国語の授業のために、教科書の付録などとして特別に作られたビデオ素材を使うことがある。これらのビデオはコースのレベルに合わせてあり、教師用マニュアルにはビデオの背景説明やディスカッションのヒントも書いてあるし、教科書にはビデオに合わせた練習問題も入っているので、ビデオに沿った授業を展開できる。しかし、教科書通りに進めることで、学習者のニーズに合わせた授業ができなくなる恐れがあることに注意しなければならない。

このような映画やビデオは、内容が少し不自然な場合もあるが、チャプターごとにスムーズに授業を行うことができるメリットがある。しかし、時間の余裕がないためにこのビデオを見せない教授者も多い (Niebisch 2012)。ビデオを使わないもう一つの理由として、ビデオに対する学習者の信憑性が低いことが原因として挙げられる。学習者は、付録のビデオが現実には即さない、ただの動く教科書だと気付くと、本来は効果的な学習につながる動画媒体へのモチベーションや興味をなくしてしまうのである：

外国語教育映画はリアルな映画に比べて魅了する力に欠けている。外国語教育映画は側学や普通のグループ授業では、モチベーションになるというより、つまらなくて学習者からは知的な興味失われる (Hecht 2004: 102)。(筆者訳)

しかし、面白いのは下手な演技のシーンが、逆に魅力的に映って、思わず笑ってしまうことで学

習者の記憶に残りやすくなることである (Niebisch 2012)。

外国語教育映画の製作では、高い信憑性のある動画を作ることが求められる。そのため、外国語教育映画の製作は信頼性という観点でつぎの3つの判断基準に分類される (Noras 2006: 91):

コミュニケーション信頼性	▶この動画は本当に発言のきっかけになるか。
演技信頼性	▶動画と現実社会に差があるか。
理解信頼性	▶母語話者と外国人視聴者の理解に差があるか。

これらの中の判断基準の一つでも合わない場合は、学習効果が下がってしまう (Hecht 2004: 103)。Noras (2006: 91-93) は、Esselborn (1991) の基準に拠って、外国語授業にふさわしい映画を選ぶための、さらに細かい選定基準を作成した。以下にその一部を抜粋する。

- ・施設
- ・ターゲットグループ
- ・メディアジャンル (情報、エンターテインメント等)
- ・学習の目的
- ・パート (イントロ等)
- ・学習者の興味
- ・新しいスタイルのエクササイズやプロジェクト

授業に適した映画の選択には、これらはある程度便利な基準であるが、質的な評価の判断基準には適さない。これらの選定基準は未だに実証されていないため、実際に使える判断基準の研究が必要である。この点に関して Scheller はつぎのように述べている。

必要とされるのは、言語学習の観点を含む、マルチメディア学習の総合的な観点からデザインすることである。言語習得とマルチメディア学習の両方の視点からの研究が欠如している (Scheller 2006: 49)。 (筆者訳)

## 2.4 他の種類の動画

上記以外にも以下のような動画がある。

### 学習者が自ら作成したビデオ

自分で作成するビデオは時間がかかるため、普段の外国語の授業において使用される機会は少ない。ただし、ビデオの作成に長い時間を必要とするために必然的に外国語と触れ合う時間が長くなるので、その分学習効果が期待される。また、ビデオカメラが安価になり、パソコンでの編集も容易になっているなどのメリットがある。

### スマートフォンビデオとインターネットビデオサイト

携帯電話やスマートフォンで撮られた映像は外国語の学習に適しており、様々な使い方ができる。また、ビデオブログは目標言語をクリエイティブに使うことができる (Gromik 2009)。ビデオブログは自由に投稿できるので、構成主義の概念に合っている。しかしプライベートではなく授業で作成した動画を公にする場合には学習者の許可を取るなどの注意が必要である。そこで制限付きで閲覧可能なラーニングプラットフォーム (Moodle 等) を使用することで、安全な環境で動画を作成、ま

たは共有することが可能になる。

#### 振り返りのためのビデオ

授業中にスピーチやロールプレイを撮影することで、学習者は自分の話し方や目標言語の使い方を振り返り、現在の自分のスキルを客観的に判断することが可能になる。また、教授者は、これによって大人数クラスでは難しい個々の学習者の発音をチェックすることができる。しかし実際に使用する教員は少ない (Niebisch 2012)。

#### ビデオチャット

ビデオチャットの特徴は、動画を保存できないように作られていることである。ビデオチャットはタンドムパートナーや目標言語の相手と直接コンタクトしたり、素早いフィードバックを可能にする。

### 3. 現在の研究状況

動画を授業に使うことに対する批判としてよく言われるのは、絵やテキスト等の動かない素材を使用する場合と比べて、動画の視聴は受動的であり、学習者はアクティブな行動が必要ないため、動かない素材の方が脳内でアクティブに活動できるということである (Hegarty 2004)。

しかし、動画の使用を教育的に支持している人も多い。なぜならば、動画は知的で文化的な交流を提供できるので、そういったメディアを使用することで、教室内の授業は、より視覚的に面白く効果的になるからである (Lindemeier/Niegemann/Strittmatter 2000: 76)。

オーディオチャンネルとビジュアルチャンネルが同時に刺激を受けるので、効果的であるという主張もある (Paivio の Dual-Coding Theory など)。

生理心理学的な研究では、映画が視聴者の感情を引き出すことが明らかにされている (Lazerus et al. 1970: 32)。メディア比較効果研究では、特にメディアの教育効果について研究されている (Lindemeier/Niegemann/Strittmatter 2000: 78)。その際メディアによって情報の受け取り方が異なる。たとえば映画では全体的な内容が記憶に残るが、テキストのみでは語彙や語順が出てきた通り記憶されるという (Meringhoff 1980: 249)。

#### 3.1 オーディオビジュアルリテラシー

絵を理解するためには、ビジュアルリテラシー (visual literacy) という能力が必要になる。つまり動画でも、静止画と同様に解読する必要がある。静止画は色、線、面積 “codierter Form” を使って情報を提供している (Weidenmann 1988: 14; Weidenmann 1991: 47)。静止画がホリスティックであるのに対して、動画は自分で見る順番が決められないため傍観者になりがちである。そのため、動画は静止画よりもスピードと方向性を決定できることから、作成者の意図が伝わりやすいという利点がある (Weidenmann 1991: 44)。動画は情報を決まったスピードで流せるので、作成者が結論やオチを思い通りに操ることができるのである。それは静止画には不可能か、ほぼ不可能である。

外国語の授業では一般的にリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの4つのスキルが必要とされる。しかし、5番目のスキルであるオーディオビジュアルリテラシーも考慮されるべきである (Esselborn 1991: 72)。

Schwerdtfeger (1997: 199) によれば、外国語の授業には実際的な動画や静止画を理解するスキルの養成が抜けている：

この世界で、我々が日々の生活で得ることができる見るスキルは、外国語の授業の研究では対象外とされている。(筆者訳)

Noras (2006: 61) はこの引用を重視し、オーディオビジュアルリテラシーのトレーニングを受けていないために効果的な学習ができない、という問題点を乗り越える必要があると主張している:

[...] 授業にはオーディオビジュアルスキルのエクササイズを必ず取り入れなければならない。(筆者訳)

Raabe (1997: 53) と Weidenmann (1994) は、リスニングに注目することは、まるでビジュアル部分の否定であると述べている。オーディオビジュアルリテラシーを5番目のスキルとして認定し、外国語の授業に取り入れる必要がある。

### 3.2 フィルムリテラシー

動画や映画を理解するためには、フィルムリテラシーという特別なスキルが必要となる。しかし、学習者たちは、動画や映画を理解するエキスパートになる必要はなく、メディアに対して敏感に意識する力を持てば良いのである:

[通常の授業などでは] 学習者は、動画や映画を理解、分析、解釈できるようになるべきである。そのために映画のシーンを正しく順序立てて整理する能力が必要となる [...]

外国語の授業の中では、目標言語の理解、つまりビジュアルオーディオリテラシーがメインテーマである [...] (Noras 2006: 74)。(筆者訳)

自然な画像理解 (ökologisches Bildverstehen) とは違って、指標的な画像理解 (indikatorisches Bildverstehen) を学ぶ必要がある (Weidenmann 1988, 1991)。これらは静止画ではもちろんのこと、動画 (特に映画) を理解するうえで必要になってくるのである:

ストーリーに対する視覚と音響の印象は、観察者の目の動きを決定するカメラの焦点やカメラのアングルに実質的に依存しており、ストーリーはこのような画像合成、特殊効果、音や演技などに影響されている (Hildebrand 2001: 44)。(筆者訳)

これらは学習者が“映画の言語”に精通している場合のみ、完全に動画の学習効果を得ることができるということを示唆している。教授者は、単に動画を見せて楽をするのではなく、外国語教育学に沿ったコンセプトで授業を組み立てなければならない (Rauh 1990: 99)。また教授者は、学習者に対して事前に映画理解能力を身に付けさせる必要がある。

## 4. むすび

動画や映画の利用は外国語の学習にとっても良い効果が期待できるが、条件や目的に気をつける必要がある。特にオーセンティック映画は授業を超え、現実世界への橋渡しとなる。オーディオビジュアルメディアは、視覚と聴覚という重要な器官を同時に刺激することができる。したがって認知的

なプロセスにも注意しなければならない。

オーセンティック素材には様々なメリットがあり、また非常に魅力的であるため、積極的に授業に取り入れるべきである。字幕を一つの選択肢としてオーセンティック素材の理解に役立てることも可能である。

“Video is easy, print is tough”という言い回しがあるが、授業でビデオを使う際には、教授者は事前・事後の準備とコンセプトの作成に追われ、また学習者も認知的なプロセスで非常に頭を使うため、通常思われているよりも大変なのではないだろうか。動画や映画を使って、学習効果を上げるためには、これらの理解が必要となる。

理想的なのは、オーディオビジュアルリテラシーとフィルムリテラシー双方のスキルを外国語の授業に取り入れることである。具体的には、動画や映画の媒体に慣れるために、これらの作り方(カメラワーク、フィルター、視覚効果、アングル等)について教えるべきである。これらができるようになってはじめて、ビジュアルとオーディオの情報が頭の中で効果的に作用し、理解可能になる。これら全ての特徴を捉えることができた時、効果的な学習に役立つという研究結果もある。これまでは、外国語の授業での動画や映画の使用についての実証的な研究は少なかったが、現在ではこれらについて様々な研究が行われている。以上のポイントをすべて押さえることができれば、外国語の授業で動画や映画を使うことによって学習効果を上げることができるだろう。

#### 参 考 文 献

- Allan, Margaret (1985): *Teaching English with Video*. Longman Handbooks for Language Teachers. Burnt Mill, Harlow, Essex.
- Baltova, I. (1999): *Multisensory Language Teaching in a Multidimensional Curriculum. The Use of Authentic Bimodal Video in Core French*. *Canadian Modern Language Review* 56 (1): 32-48.
- Brandi, Marie-Luise (1996): *Video im Deutschunterricht. Eine Übungstypologie zur Arbeit mit fiktionalen und dokumentarischen Filmsequenzen*. Fernstudieneinheit 13. Langenscheidt.
- Edelhoff, Ch. (1975): *Schulfernsehen im fremdsprachlichen Medienverbund. Über das Verhältnis von Fernsehfilmen und Begleitmaterial im Fremdsprachenunterricht*. In: Brodke, D. (Hrsg.): *Werkstattgesprächs-Ergebnisse*. Schöningh/Schroedel. Paderborn, Hannover.
- Esselborn, Karl (1991): *Neue Beurteilungskriterien für audiovisuelle Lehrmaterialien*. In: *Zielsprache Deutsch* 2, 64-78.
- Guichon, N. & McLornan, S. (2008): *The effects of multimodality on L2 learners. Implications for CALL resource design*. *System* 31 (1):  
[http://hal.archives-ouvertes.fr/docs/00/35/62/43/PDF/Guichon\\_McLornan-Multimodality.pdf](http://hal.archives-ouvertes.fr/docs/00/35/62/43/PDF/Guichon_McLornan-Multimodality.pdf)
- Gromik, Nicolas (2009): *Producing Cell Phone Video Diaries*. In: Thomas, Michael (Hrsg.): *Handbook of Research on Web 2.0 and Second Language Learning*. Hershey, PA: Information Science Reference: 259-273.
- Hecht, Susanne (2004): *„Magari è stata la telenovela“*. Über die Leistungen von Film im Sprachunterricht und in Multimedia-Anwendungen ab der Anfängerstufe. *Neue Ergebnisse und das Fazit einer empirischen Studie*. In: *Studi per l'insegnamento delle lingue europee: atti della prima e secondogiornata di studio (Firenze 2002-2003)*, a cura die María Carlota Nicolás Martíneze Scott Staton. Firenze University Press. Firenze: 101-128.

- Hegarty, M. (2004): Dynamic visualizations and learning: getting to the difficult questions. *Learning and Instruction* 14: 345-351.
- Lazerus, Richard S./Averill, James R./Opton, Edward M. Jr./ (1970): Toward a cognitive theory of emotion. In: Arnold, M. (Hrsg.): *Feelings and emotions*. Academic Press. New York.
- Lindemeier, Tanja/Strittmatter, Peter/Niegemann, Helmut (2000): *Lehren und Lernen mit Medien. Eine Einführung*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt.
- Löschmann, Marianne (1991): Video im Fremdsprachenunterricht – Mittel für das Lernen. In: *Zielsprache Deutsch 2*.
- Mayer, Richard E. (2001): *Multimedia Learning*. Cambridge University Press. New York.
- Mayer, Richard E./Moreno, Roxana (2003): Nine ways to reduce cognitive load in multimedia learning. In: *Journal of Educational Psychology Review* 14 (1): 87-99.
- Mayer, Richard E. (2005): Cognitive Theory of Multimedia Learning. In: Mayer, Richard E. (Hrsg.): *The Cambridge handbook of multimedia learning*. Cambridge: 31-48.
- Meringhoff, Laurene K. (1980): Influence of the medium on children's story comprehension. *Journal of Educational Psychology* 72: 240-249.
- Müller, Helmut/Raabe, Horst (1995): Audiovisuelle Medien. In: Bausch, Karl-Richard Christ, Herbert/Krumm, Hans-Jürgen (Hrsg.) *Handbuch Fremdsprachenunterricht*. Francke. Tübingen, Basel: 318-320.
- Niegemann, Helmut M. et al. (2008): *Kompodium multimediales Lernen*. Springer. Berlin & Heidelberg.
- Niebisch, Daniela (2012): *Persönliche Gespräche*.
- Noras, Dorothee (2006): *Film und Video im Fremdsprachenunterricht im Spannungsfeld didaktischer Gestaltung*. Grin Verlag. Norderstedt.
- Raabe, Horst (1997): Das Auge hört mit. Sehstrategien in Fremdsprachenunterricht? In: Rampillon, Ute/Zimmermann, Günther (Hrsg.): *Strategien und Technik beim Erwerb fremder Sprachen*. Ismaning.
- Rauh, Reinhold (1990): Sprache und filmische Wahrnehmung: In: Hickethier, Knut/Winkler, Hartmut (Hrsg.): *Filmwahrnehmung: Dokumentation der Gesellschaft für Film- und Fernsehwissenschaft-Tagung*. Berlin.
- Scheller, Julija (2008): Animationen in der Grammatikvermittlung. *Multimedialer Spracherwerb am Beispiel von Wechselprepositionen*. Lit. Münster.
- Schwerdtfeger, Inge C. (1997): Zur (Wieder) Entdeckung von Sehen und Imagination für fremdsprachliches Lernen – das kognitive Lernmodell auf dem Prüfstand. In: Wolff, Armin/Tütken, Gisela/Liedtke, Horst (Hrsg.): *Gedächtnis und Sprachenlernen*. Regensburg: 195-209
- Sherman, Jane (2003): *Using Authentic Video in the Language Classroom*. Cambridge University Press.
- Strittmatter, Peter/Niegemann, Helmut/Bernd, Heike (2000): *Lehren und Lernen mit Medien. Eine Einführung*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt.
- Weidenmann, Bernd (1988): *Psychische Prozesse beim Verstehen von Bildern*. Hans Huber. Bern.
- Weidenmann, Bernd (1991): *Lernen mit Bildmedien*. Beltz. Weinheim.